



有斐閣選書

中古の文学

秋山 虔
藤平 春男
編

日本文学史 2



秋山虔・藤平春男編

古の文学

* 日本文学史 2 *



有斐閣
選書

編者紹介

あき せき けん
秋 山 虔 (東京大学文学部教授)
ふじ ひら はる お
藤 平 春 男 (早稲田大学文学部教授)

中古の文学〈日本文学史2〉 〈有斐閣選書〉

昭和51年6月25日 初版第1刷印刷

昭和51年7月5日 初版第1刷発行



編 者 秋山虔・藤平春男

発 行 者 え ぐさ ただ あつ
江 草 忠 允

発 行 所 株式会社 有 斐 閣

東京都千代田区神田神保町2～17

電 話 東 京 (264) 1 3 1 1 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 三陽社・製本 高陽堂

©1976, 秋山虔・藤平春男. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★ 定価はカバーに表示してあります

はしがり

一般に中古といわれる平安時代は、政治史的には律令体制が崩壊し、摂関政治の時代を経て院政期に至る四百年間をいうが、それは同時に一つの稀有な文学史の時代でもあった。たしかにこの時期の文学は、おもに平安京の宮廷貴族社会を温床として開花するものであったから、日本国民全体からすればひとにぎりの支配階級によって独占されたそれであったといえるかもしれないが、そのことをうち越えて、文学が真に日本的な形姿を自立させ、無類に高度の達成を遂げることになった事情を重視しなければならないだろう。

この時代の初期が唐土への異常な傾斜に特色づけられることは、前代を引き離して新しい時代を起こそうとする運動がもたらす必然的結果であったといえようが、やがてそうした風潮をしのいで国風文化の振興期がおとずれ、ここに文学史の新たな地平が開けてくるのである。注目すべきは、日本人が日本語をそのままに表記しうる国字＝平仮名が発明されたということであった。それまで異国の文字である漢字を習得することによってしか思想・感情を表現することのできなかつた不自由から、日本人は一気に解放されたのである。『古今和歌集』にせよ『源氏物語』にせよ、これら日本の古典の精髓と目される文学も、この平仮名の発明がなかったとしたら、ついに生誕することもなかったであろう。

もちろん『古今和歌集』や『源氏物語』などによってのみこの時代の文学が代表されるのではない。数々の文学形態がそれぞれに時代の表現として生誕し、日本文学の黄金時代を現出した諸相は、その固有の意味に即して追求されなければならない。

本書はそのような平安文学史の全体像に迫るための問題提起の書でありたいという願いによって編まれたが、幸いに執筆者諸氏が私たちの編集意図を理解され、かぎられた紙数にもかかわらず、それぞれに充実した内容の原稿を寄せてくださったことは感謝にたえないところである。

なお巻末の「年表」は渡辺秀夫氏、「参考文献」は伊藤丈一氏に依頼してこれを作製していただいた。両氏の協力に対しても感謝したい。

私たちは、本書が小冊子ながら新鮮な平安文学入門の書として十分にその役割りを果たしうるものと確信する。

昭和五十一年五月十日

秋山 虔
藤平 春男

目次

はしがき

第1章 平安新京の文学



概説

秋山虔

1

九世紀文学の位相(1) 平安新京経始の意義(2) 唐風の平安新京(4) 嵯峨朝の文遊(6)
文章道の位相(8) 菅原道真の時代(9)

◆ 勅撰三集

松浦友久

13

『凌雲新集』(13) 『文華秀麗集』(15) 『経国集』(16) 秋の悲しさ(16) 経国的文学観への
共感(17)
▼詩と音楽(18)

◆ 僧団の文学

後藤昭雄

19

宮廷文学圈との交渉(19) 空海(20) 入唐者として(21)

◆ 菅原道真

永藤靖

22

詩と学問と政治(22) 最初の詩(23) 青春の詩(24) 讃岐守時代(25) 大宰府謫居(26)

◆ 『本朝文粹』の世界

大曾根章介

27

第2章 古今集時代

紀長谷雄と三善清行（27） 紀伝道の衰退（28） 村上朝の文壇（29） 傍流の詩人たち（29）
知識人の一典型——慶滋保胤（30） 一条朝の文壇（31）
▼学者と怪異物語（32）

概説

藤平 春男 33

『万葉集』以後（33） 仮名文字の普及（36） 宮廷政治の動向（37） 和歌の宮廷詩化（39）

『古今集』の詩的特性（43） 散文文学の芽生え（47）

❖ 業平・遍昭・小町 49
鈴木日出男

『古今集』の歌風と六歌仙時代（49） 在原業平（51） 僧正遍昭（54） 小野小町（54）

❖ 『古今集』の成立・構成 56
久保木哲夫

『袋草紙』における藤原清輔の論（56） 延喜五年四月十八日（57） 成立過程（58） 構成と配列（59）

▼平安時代の長歌（60）

❖ 『古今集』の歌人 61
村瀬 敏夫

『古今集』歌人の階層（61） 卑官歌人の登場（62） 主要歌人の生涯と歌風（63）

▼伊勢と紫式部（65）

❖ 歌論 66
近藤 潤一

最初の歌論——『古今集』両序（66） 両序の形式と位相差（67） 両序の組織（68） 宮廷和歌

史観と花実論・心詞論(69) 『和歌体十種』(70)

◆ 紀 貫 之

長谷川政春 71

習作時代の歌(71) 完成時代の歌(72) 晩年の歌(73) 散文への道——『土佐日記』(75)

◆ 神楽・催馬楽

倉林 正次 76

神楽(76) 催馬楽(77)

▼地方に伝わる催馬楽(79)

第3章 物語文学の形式

■ 概 説

片桐 洋一 83

『三宝絵詞』の序文(83) 『源氏物語』以前の散佚物語(85) 散佚物語の性格(85) 物語は女のためのもの(86) 耐え忍ぶ女主人公(89) いたわりの心——デリカシー(90) 「もののあはれ」の文学へ(91) 男性作者と女性の読者(92) 再び『三宝絵詞』の序文について(93)

◆ 『竹取物語』

室伏 信助 95

仮名物語の成立(95) 物語の特質(97)

◆ 『うつほ物語』

中野 幸一 100

双頭の物語(100) 物語の構造(101) 成立時期と作者(102) 文学史的価値(103)

◆ 『落窪物語』

神作 光一 105

継子いじめの物語(105) 梗概と冒頭部分(106) 四部構成(107) 作者と成立事情(108)

❖ 『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』…………… 福井 貞助 110

『伊勢物語』の出現 (110) 業平像の形成 (111) 歌物語の生成 (112) 平中と『平中物語』 (113)
歌語りから歌物語へ (114) 歌物語時代と『大和物語』 (114) やまとの世界 (115) 歌物語と物語文学 (116)

第4章 貴族生活と和歌

■ 概 説…………… 橋本不美男 117

貴族生活と情趣美 (117) 貴族の教養 (119) 村上朝の宮廷行事と和歌 (121) 円融・花山・一条朝と和歌 (124) 後宮生活と和歌 (128)

❖ 『後撰集』から『拾遺集』へ…………… 杉谷 寿郎 130

『後撰集』 (130) 天徳内裏歌合 (132) 家集の編纂と『古今和歌六帖』 (132) 『拾遺抄』から『拾遺集』へ (133)

❖ 源 順…………… 杉谷 寿郎 135

無尾牛歌——沈淪と慨嘆 (135) 五嘆吟——若年の順 (136) 撰和歌所寄人——順の春 (136)
不遇と老貧——晩年の順 (137) 順の文学 (138)
▼馬子に教えられた『万葉集』の訓み (139)

❖ 曾 禰 好 忠…………… 小町谷照彦 140

従順な下層官人 (140) 専門歌人としての位置 (141) 表現の「新しき」の意味 (142) 連作的な形式の歌 (144)

▼曾禰好忠と藤原長能 (145)

◆和泉式部

藤岡 忠美

146

紫式部の和泉式部評 (146) 和泉式部の贈答歌 (147) 少女時代のこと (148) 和泉式部の恋と和歌 (149)

◆藤原公任

小町谷照彦

151

一条朝歌壇の指導者 (151) 多彩な活動と著作 (152) 優美平淡と余情の美学 (153) 心詞調和の詠作 (155)

▼藤原公任と一条朝の才女たち (156)

第5章 女流文学の開花

■概説

木村 正中

157

女流文学の源流——小野小町 (157) 『伊勢集』の意義 (160) 宮廷女流文学の盛況 (166) 女流文学の特質——心の世界 (168)

◆『蜻蛉日記』

木村 正中

169

歌人としての道綱母 (169) 『蜻蛉日記』と和歌 (170) 『蜻蛉日記』の構成 (171) 文学史的意義 (172)

◆『和泉式部日記』

平田 喜信

174

歌物語的性格 (174) 忍ぶ恋の物語 (175) 『日記』と『家集』 (176)

◆『枕草子』	野口元大	180
--------	------	-----

『枕草子』の謎 (180) 定子後宮と『枕草子』 (181) 『枕草子』の性格 (183) 香ⁱ峰の雪 (184)
磨かれる美意識 (185) 紫式部と『枕草子』 (186)

◆『紫式部日記』	野村精一	187
----------	------	-----

『紫式部日記』の成立論的解体 (187) 紫式部のまなざしとその言語空間 (188) 消息文の文体と空間 (190)

◆『源氏物語』の成立と構想	篠原昭二	192
---------------	------	-----

物語の歴史の中で (192) 成立過程の探索 (194) 構想の発展 (195)

◆『源氏物語』の主題	篠原昭二	197
------------	------	-----

主題を担うもの (197) 主題性の発展 (200)

第6章 後冷泉朝文壇

概説	犬養廉	208
----	-----	-----

頼通の世界の到来 (209) 後朱雀朝の後宮 (210) 後冷泉朝の構造 (211) 歌合の昂揚 (212) 四条宮文芸サロン (214) 六条斎院家物語合 (216) 物語文学の行くえ (217) 後冷泉朝の終焉 (218)

◆『狭衣物語』	永井和子	220
---------	------	-----

冒頭の特異性 (230) 内容と作者 (221) 『狭衣物語』の逆説 (221)

▼『無名草子』の『狭衣物語』評 (223)

◆『夜の寝覚』

鈴木 一雄 224

『源氏物語』の心理主義的後継者 (224) 題名・作者・成立時期 (225) 巻数・構造・内容 (225)

後期物語の新生面 (227)

▼『夜の寝覚』と『寝覚物語絵巻』 (227)

◆『浜松中納言物語』

池田 利夫 228

作者 (228) 筋書き (228) 『源氏物語』の影響 (230)

◆『堤中納言物語』

鈴木 一雄 232

異彩を放つ短編物語集 (232) 各編の特性 (233) 短編物語の性質 (233)

▼六条斎院家題物語歌合の発見 (235)

◆『更級日記』

犬 養 廉 236

作者 (236) 『更級日記』の世界 (237) 構成 (238) 流布 (239)

◆能因と和歌六人党

上 野 理 241

能因の生涯 (241) 能因の歌の世界 (242) 和歌六人党 (243) 六人党の歌 (244)

◆『後拾遺集』

近 藤 潤 一 246

白河朝の勅撰集 (246) 新風——「ひとへにをかしき風体」 (247) 新風と知巧の様式 (248) 撰集の経緯 (249)

◆『采花物語』と『大鏡』

竹 鼻 績

251

歴史物語の出現(251) 『采花物語』の構成と内容——編年体と作り物語的世界(252) 『采花物語』の性格と位置(253) 『大鏡』の構成と内容——紀伝体と戯曲的構成(254) 『大鏡』の叙述態度(255) 『大鏡』の位置(256)

第7章 院政期文学

■概 説

井上 宗雄

261

院政期の上限と下限(261) 院政期社会の特徴(263) 文化史的展望(264) 文学の動向(1)——物語・日記・漢詩文(267) 文学の動向(2)——和歌(270) 院政期文学の位置(273)

◆源 俊 頼

上 野 理

274

俊頼の生涯(274) 俊頼の作風(275) 『俊頼髓脳』『金葉集』(276)
▼源俊頼と猿楽(278)

◆藤原清輔と藤原俊成

松野 陽一

279

歌道師範家の確立(279) 不遇な出発——崇徳院期(280) 明暗の逆転——二条天皇期(282) 清輔・俊成並立時代(282) 俊成独占期(283)

◆『梁塵秘抄』

岡野 弘彦

286

後白河法皇と今様(286) 神仏に歌いかける歌(287) 漂泊の歌びと(288) 後鳥羽院とよみがえる歌謡(289)

▼『梁塵秘抄』と近代短歌 (290)

❖ 西 行

松野 陽一

291

隠遁者歌人たちと狂言綺語の和歌観 (291) 王朝貴族の美意識と中世的行動者の間 (292) 旅と文学 (293) 晩年の伊勢信仰と起請をめぐって (294)

❖ 藤原明衡と大江匡房

大曾根章介

296

寛弘以後の漢文学 (296) 藤原明衡の生涯 (296) 『本朝文粹』 (297) 『明衡往来』と『新猿樂記』

(298) 大江匡房の生涯 (298) 大江匡房の広範な文学活動 (299) 院政期漢文学の新傾向 (300)

▼金儲けがうまくいった大江匡房 (301)

第8章 貴族文学の周辺

■ 概 説

篠原 昭二

302

民衆の文学 (302) 貴族浄土教と仏教説話 (306) 他界の発見——浄土と田舎世界 (308) 再び民衆の文学 (311)

❖ 『日本霊異記』

神野志隆光

315

作者と成立 (315) 成立基盤 (316) 歴史意識 (318)

❖ 『将門 記』

梶原 正昭

320

資料的意義と文学性 (320) 文体の特色 (321) 成立年代・作者 (322) 成立基盤 (323) ▼新皇託宣と菅公の霊 (324)

◆ 往生伝・法華驗記

大曾根章介 325

『日本往生極樂記』(325) 『純本朝往生伝』『拾遺往生伝』『後拾遺往生伝』(326) 以後の往生
伝(327) 法華驗記(328)

◆ 『往生要集』

柳井 滋 329

『要集』の背景(329) 『要集』の立場——観想の念仏(330) 病者への勧進——善友同行(331)
二十五三昧会(331) 源信の生涯(333)

▼ 源信僧都と母(334)

◆ 『今昔物語集』

池上 洵一 335

説話集の時代(335) 世俗説話——武士の心ばえ(336) 仏教説話——世俗説話との接点(337)
『今昔』説話の独自性(338)
▼ 『今昔物語集』の書名(339)

◆ 古典と私

『古今集』の春

馬場あき子 80

『枕草子』と私

竹西 寛子 202

加賀少納言

秦 恒平 205

平安文学との付けひ

寺田 透 258

中古文学私記

大岡 信 340

中古の文学 参考文献——343

中古の文学 年表——350

索引——卷末

〔本書の構成と凡例〕

構成

①本書は、各章とも、■印の文学史的概説と、◆印の各論（作家・作品論が中心）とから成っています。また、各論の冒頭には、原文に接しながら解説を読むことができるように、原文の一部を引用してあります。なお、各論に関連する小記事を、▼印の囲みとして入れたケースがあります。

②◆印のエッセーは、「古典と私」という観点から、古典とのふれあいを語ります。

凡例

①原文引用の際の底本は、特定せず、また、その訓みも各執筆者の判断によっています。

②原文の漢字は、新字体によったところもあります。

③原文の仮名遣いは歴史的仮名遣いによりました。ふりがなも同様です。

写真提供

写本の所蔵は、それぞれ以下のとおりです。『大斎院前の御集』（日本大学総合図書館）、『源氏物語』（日本大学総合図書館）、『更級日記』（宮内庁侍從職）、『詩序集』（宮内庁書陵部）。なお、掲載の写真は、複製本によっています。

京都の写真は、実業之日本社提供。

執筆紹介 (五十音順)

秋山 虔 (東京大学文学部教授)

池上 洵一 (神戸大学文学部助教授)

池田 利夫 (鶴見大学文学部教授)

大養 廉 (お茶の水女子大学文教育学部教授)

井上 宗雄 (立教大学文学部教授)

上野 理 (早稲田大学文学部教授)

大曾根 章介 (中央大学文学部教授)

岡野 弘彦 (国学院大学文学部教授)

梶原 正昭 (早稲田大学教育学部教授)

片桐 洋一 (大阪女子大学文学部教授)

神作 光一 (東洋大学文学部教授)

木村 正中 (明治大学文学部教授)

久保 哲夫 (都留文科大学文学部教授)

倉林 正次 (国学院大学文学部教授)

神野 隆光 (新潟大学文学部講師)

後藤 昭雄 (静岡大学教育学部助教授)

小町谷 照彦 (東京学芸大学教育学部助教授)

近藤 潤一 (北海道大学文学部助教授)

篠原 昭二 (東京大学教養学部助教授)

杉谷 寿郎 (日本大学商学部助教授)

鈴木 一雄 (金沢大学文学部助教授)

鈴木 日出男 (東京学芸大学教育学部助教授)

竹鼻 結子 (山梨県立女子短期大学教授)

永井 和子 (学習院大学文学部講師)

中野 幸一 (早稲田大学教育学部教授)

永藤 靖 (明治大学文学部講師)

野口 元大 (茨城大学文学部教授)

野村 精一 (山梨大学教育学部教授)

橋本 不美男 (宮内庁書陵部図書調査官)

長谷川 政春 (青山学院高等部非常勤講師)

平田 喜信 (大妻女子大学文学部助教授)

福井 貞助 (弘前大学文学部教授)

藤岡 忠美 (神戸大学文学部教授)

藤平 春男 (早稲田大学文学部教授)

松浦 友久 (早稲田大学文学部教授)

松野 陽一 (東北大学教養部教授)

村瀬 敏夫 (東海大学文学部教授)

室伏 信助 (跡見学園女子大学文学部教授)

柳井 滋 (聖心女子大学文学部教授)

大岡 信 (詩人・明治大学法学部教授)

竹西 寛子 (作家)

寺田 透 (評論家)

秦 恒平 (作家)

馬場 あき子 (歌人)